

春のはじめのことぶき啓したてまつらんとて、いそぎまうのぼる、おのがむれくつらみだれず、打物鍵いしくのぐいかめしう引續け、さきおひいそぎまゐるなん、何よりことに珍らかにして、かゝるわざはいづこのとつ國にあべきみものとおぼえず、げに武藏野のひろきおほん惠に、よもの民くさなびきつかふまつるさま、ことわりにおもひたまへらるゝもかしこくなん、町くだりの家はよべおきあかしたるまゝに、やり戸もはなたす、すだれおろしこめ、まめやかに見入らるゝは、初夢むすぶ人もありなましとゆかし、又初春の折にあひたるものあきなふ家は、門きよらにはらひあけ、くさくのもの花やかに、よそひならべすゑたるもあり、大路はのどやかに松たてわたし、家ごとに、もちゐ、わかかな、おほねなどあつものにてうじ、朝氣いはひ、小松、うちあはび、ほしぐり、ねり柿なのりそやなにやと、洲濱にまうけすゑて、入くるまらうどをもてなしかしづく、とその帯くれなゐに、もちゐの鏡、白う色はえたるもとりくにつきせず、かたみにさうぞき行かひ、春のことぶきいひかはすもめでたし、それが中にはまんざいといふ者、年ごとに三河國よりきつ、ことぶきいふも立まじりたる、ゑぼうし素袍引かけ、とひなれたる家にかならす入來て、鼓うち歌ひはやしたる、さうかのけうさくなる、れいの事ながらうちゑまるゝ、がしまいて節分などにあたりたるとしは、ひゝらぎいわしのかしら門にさしわたし、くるゝを待あへず、豆打ちらし、鬼おふ聲きほひよぶもにぎはし、かたゐはとしいみはらふとて門にたち、さるがう事どもいひすて、行、神のおまへのともしびあかうか、げすびつに火いみじうおこしそへて、夜をもるさまにさうぞきたるも、とりくにつきせず、すべて此國のみつのあしたなんこ、に生れて、とし月なれぬれど、猶ふりがたうかみさび、昔おぼゆるてぶりは、あかすめづらかにあるわざにぞ、

〔山之井春〕あら玉の年立歸る心をつらねば、たて松はにほんによせて君をことぶき、かざるほな